



Title	<紹介> 滝川幸司著『菅原道真：学者政治家の栄光と没落』
Author(s)	蒲, 姣艶
Citation	語文. 2020, 114, p. 57-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

滝川幸司著『菅原道真——学者政治家の栄光と没落——』

蒲 姣 艶

本書は、滝川幸司氏（以下、著者）著『天皇と文壇 平安前期の公的文学』と『菅原道真論』との二冊に続く著書である。

道真は、「学者でありながら右大臣に昇進した」とされる。しかし、「学者」としての側面が色濃く反映されているのは、道真が文章博士を務めた約十年間である。「文章博士」は大学寮紀伝道の教官で、官僚である。道真は「学者」よりも官僚として生涯を貫いている。本書のポイントは紀伝道出身の官僚という視座で道真の生涯を俯瞰することである。以下に目次を掲げる。

序 章 儒者世界にそびえ立つ家系——学問の家

第1章 苦学の日々——文章生、文章得業生から官僚へ

1 勉学——十一歳で漢詩を詠む

2 大学寮紀伝道への道——試験、「対策」との格闘

3 官僚としての出発——詩人無用論と順調な昇進

第2章 文章博士時代——父祖の跡を嗣ぐ

1 儒家官僚、師として——文章博士兼任と菅家廊下運営

2 渤海使の来朝——漢詩による接遇

3 批判と中傷——匿詩事件と藤原基経への接近

第3章 讃岐時代——国司の政務と詩人意識

1 讃岐守に任ず——地方官任命は左遷か

2 国司として——職務への不満と精勤

3 宇多天皇の即位——藤原基経をめぐる阿衡事件

4 阿衡事件と道真——紀伝道の学問とは

第4章 右大臣への道——宇多天皇の近臣として

1 帰京、藏人頭への就任——橘広相の死

2 参議への昇進——藤原時平との関係、立太子問題

3 遣唐使発見問題——遣唐大使道真

4 「朕の近習」「大師」——宇多天皇の側近、そして博士

5 宇多天皇の讓位——上皇の側近、天皇の功臣として

第5章 万事皆夢の如し——大宰府への左遷

1 昌泰の変——正月二五日、太宰権帥に任ず

2 太宰府での生活

3 死、その後——北野天満宮の創建

第一章は、道真が官僚になるまでの生いたちを追跡する。十五歳で元服し、十八歳で文章生試に合格する。二十三歳で文章得業生に選ばれ、二十六歳で、官吏登用試験である対策に及第し、官僚世界に出ることになる。勉学一途の結果、若く出仕できた。著者は、道真が出仕前から「詩人無用」の声が高まった状況をめぐって、「詩人無用」が父是善向けの非難だと述べた上、その後も続くその非難に対して、道真は、官廷詩宴で詩を詠む「詩臣」という立場があると答えたと結論づけた。

第二章は、文章博士の軌跡を辿るものである。三十三歳、かなり若い年で文章博士に任命された。文章博士である約十年間、「公私ともに多忙を極めつつ諍議中傷に囲まれた不安定な時期」である。その中、陽成朝に摂政として政権を運営していた基経が光孝天皇の即位により、摂政を離れ、太政大臣のみの職となる。ここでは、太政大臣に職掌があるかどうかが問題となる。先行論では、道真は太政大臣に職掌がないと論断したと評価されている。それに対し、著者は改めて道真の答申を検討し、道真が「そのように明確に論断するのではなく、職掌がないけれども、政治を執行することはできるという方向で結論を出そうとしている」と述べる。ここでの論議は第三章「阿衡事件」にも繋がっていく。

第三章では、讃岐時代の活動を纏める。道真は讃岐守の任命について、「分憂は祖業ではない」と不満の意を漢詩に読み込んでいる。著者は「薨卒伝」に着目し、「紀伝道出身者は地方官として治績をあげることが期待されていた」とした上、また祖父清公、父是善のいずれも地方官に任じられたということを踏まえて、道真が「地方官に任じられること自体は不審ではな」く、「文章博士を解かれての赴任は不満」だと考えていると述べる。その後、宇多天皇の勅答に用いられた「阿衡の任を以って、卿の任と為す」という表現が発端で、「阿衡事件」が始まった。「阿衡事件」について、旧来の説では、基経と天皇親政を目指す宇多天皇との対立を深刻に捉えている。近年の説では、宇多天皇が親政を目指したとは考えず、基経との深刻な対立はなかったと理解している。先行

研究に対し、著者は、紀伝道で文章を作る際には「断章取義」を行うのを自覚しながら、その「断章取義」を自ら否定し、明経道の結論に従うべきと主張する紀伝道の儒家たちの異例な姿勢に着目し、これは「基経の意向、あるいは意向への忖度によって生じた事態」で、このことから、「基経の宇多天皇に対する牽制を暗示している」と述べている。

第四章では、讃岐から帰京し、右大臣に昇進するまでの期間を追う。この期間に、遣唐使発遣の問題があった。この問題について、著者は近年の古代史研究成果を踏まえて、遣唐使は停止されず、計画は続いていたと述べている。

第五章では、太宰府での生活を追う。道真の左遷が藤原時平の主導によるというのは通説である。それに対し、著者は醍醐朝における宇多上皇と道真、宇多上皇と時平、時平と道真、醍醐と道真とそれぞれの関係性を総合的に確認した上で、「道真自身に問題があったという以上に、宇多法皇の、道真に対する過度の厚遇、信頼が要因の一つに数えられ」と述べている。

著者は、道真の生涯という縦軸を、それぞれ五つの段階に分けて述べる。各段階に政治の揺れ動きを踏まえて、官僚・学者・政治家・詩人という複眼的な視点から、道真の軌跡を立体的に復元し、より一層道真像を鮮明に描いている。本書は後の道真伝の基本となると言えよう。

(二〇一九年九月刊行、中央公論新社、二六四頁、八六〇円＋税)

(は こうえん・本学大学院博士後期課程)